

## シラヒゲウニの種苗生産研究（概要）

島袋新功\*

本研究は、昭和56～58年度の3年間、水産庁の指定調査研究総合助成事業として実施された。研究成果については、昭和58年度指定調査研究総合助成事業報告書（シラヒゲウニ種苗生産研究）（沖水試資料No81）として別途報告したので、ここでは概要のみを述べる。

(1) シラヒゲウニのふ化幼生に *Chaetoceros gracilis* を投与して飼育した結果、20日後の8腕後期幼生（稚ウニに変態する直前の幼生）までの生残率は、500ℓパンライト水槽6面のうち4面では64.3～89.3%を示した。しかし残りの2面では幼生の生長不良や途中で全滅したりして変態期幼生まで至らなかった。なお、幼生飼育期間中の水温は27.9～31.4℃で、午後の水温は30℃を越す日が多かった。

(2) 8腕後期幼生を、予め微細藻類を着生させた透明塩ビ波板の入った水槽に移して飼育した結果、約1カ月後に殻径1～3mmの稚ウニ23,000個を得た。8腕後期幼生からの生残率は、水槽により1.0～9.1%と異なったが、平均すると5.2%であった。

(3) 天然ウニからの採卵時期について検討したところ、天然の産卵期である10～12月よりも9～11月に採卵率、採卵数、ふ化率ともに高い傾向を示した。しかし6月にも好成績を示すことがあるので、採卵結果は親ウニの採取場所、個体差等により大きく左右されると考えられる。

(4) 口器除去法で採卵した後、KCl注入法でさらに大量の採卵が可能であるが、KCl刺激による卵はふ化率が低下する傾向が見られる。口器除去法でも1個体の親ウニから500～3,000万粒の採卵が可能であるので、KCl刺激による採卵の必要は特になかった。

\* 現在、沖縄県水産試験場栽培漁業センター